

# 重新复活的活人剑

## 甦った「活人剣」

可睡齋には、日清講和記念碑の「活人剣」がある。それは、明治三十一年、奥の院に通じる小道のほとりにある「六字穴」の前に建立された。剣の制作者は、明治を代表する彫刻家、高村光雲である。

しかし、第二次世界大戦中に、金属製の剣身は保出され、石造の基壇と副碑のみが創建当初の面影を残し、長いこと寂しく佇んでいた。

石造りとはいうものの、このまま放置しておくとは堪えかねて、石造りから、再建活動が進められた。賛同者を募り、募金活動をし、新たな剣の制作には当代理一の金属工業家、宮田亮平東京藝術大学学長にお引き受けいただき、足掛け四年の歳月を経て、竣工の運びとなった。

この「活人剣」の言葉は、依藤の尊徳の体験から出たものであり、そこに深い感慨を感じた。当時の日置烈は可睡齋を元として、「活人剣」の記念碑がここに誕生したのである。

この度の「活人剣」の再建が、地域の大事な歴史遺産として、往時を振り返るよすがとなるとともに、これからの日中友好さらには世界平和の象徴となることを願って止まない。

二〇一六年（平成二十八）年三月吉日 活人剣再建委員会



孫 逸仙  
清国革命の大先鋒



梁 善長  
天竺の佛を尊ぶ

この「活人剣」とは、日清戦争時に、医業の方で困難と奮闘し、天竺の佛を尊ぶことにも、この戦争で亡くなった日清両国の戦死病死者を保護するために建てられたものであり、明治二十八年三月、清国講和全權大臣として来日した李鴻章が交渉会場（春帆楼）からの帰途、暴漢に狙撃され顔面を重傷する大事件が発生した。依藤は救命により直ちに下関に赴き、全善堂で李の治療に当たり、見事に快癒させて、李は萬事結ばれた。

治療中のある日、依藤が李に軍医を刺しているのを不思議に思った李が「軍医の仕事に剣は必要では」と尋ねたところ、依藤は即座に「これは人を救う剣ではなく、人を活す「活人剣」である。嘗て多量の病と戦っており、病を治す「活人」と同じ、手を心療から感動させた。





現在の西洋人剣碑

新活人剣の説明牌

在可睡斋里有一块日清媾和纪念碑“活人剑”。这是于明治31年（1898年）在通往后院的小路的附近的“六字穴”前建成的。剑的制作者是代表明治雕刻文化的雕刻家高村光云。

但是在第2次世界大战中剑的金属的部分被交公，只剩下石头造的台座以及副碑，令人联想到旧时的风貌。岁月荏苒，唯有台座的孤影伫立可睡斋中。

虽说是石头建造的，如果放置不管的话，不仅仅是台座，就连与活人剑相关的那段真实的历史也要被世人忘却。有志之士们担心这样的事情会发生，于是就推进再建活动，并寻求赞同者进行募捐。新的活人剑是特别邀请当代著名的

金属工艺家宫田亮平东京艺术大学校长制作的，他在接受了我们的请求之后，共花费了 4 年的时间完成了制作工作。现在，我们终于迎来竣工的时刻。

所谓的活人剑原来是为了为了表彰在日清战争结束之时以高超的医术拯救了可称之为国难的陆军军医总监佐藤进（顺天堂第 3 代堂主）的伟绩，以及为纪念在两国的战死者以及病死者而建造的。明治 28 年（1895 年）3 月，作为大清国媾和全权大臣来日的李鸿章在离开谈判会场的“春帆楼”返回住宿之路的路上发生被暴徒袭击造成脸部受伤的重大事件。当时，佐藤接受天皇之命立刻赶往下关竭尽全力为给李鸿章治疗，结果李鸿章伤病很快得到治愈，签订条约之事也顺利完成。

在治疗时的某一天，李鸿章看到佐藤总是穿军服并佩着刀剑觉得不可思议，于是他就问佐藤，“医生工作时是不是不用佩剑。”

对此，佐藤立刻回答说，“这不是一把杀人的剑，而是让人活着的活人剑。平时拿着它与百病战斗，百战百胜。”

这个回答令李鸿章非常感动。

这个关于活人剑的回答与佐藤学习过禅宗的经历有关，当时可睡斋方丈日置默仙从这段佳话里感到活人剑和可睡斋之间缘分不浅，于是就竭尽全力提出建议，于是在这一块可睡的土地上建成了活人剑的纪念碑。

如今，我们再建活人剑这一隶属地区的历史遗产，缅怀往事并衷心祈祷活人剑成为今后的日中友好以及世界和平的象征。

2016 年（平成 28 年）年 3 月吉日 活人剑再建委员会